

週日の説教

金 大烈 神父 2011年3月25日(金)

《未来の希望とは》

主の平和

実際にナザレとは田舎の小さい村です。しかし今は、ナザレという地名を知らないキリスト教信者はいないと思います。そのくらい大きな意味を持って、シンボルになっている町なのです。

その当時のことを考えてみますと、田舎、誰にも知られていない小さな田舎の村です。そこにあの大天使ガブリエルが現れて、彼女に何か言ったとしても、誰にも分からなかった。そのような出来事があったことすら殆ど人は知らなかったのでしょうか。そのお父さん、人間のお父さんの仕事は大工でしたね。小さい村で、毎日大工をしながら生計を立てていた。彼がもしちゃんとした学歴を持っている人だったら、多分ナザレという小さい村で、大工の仕事をしてはいなかったでしょう。そのくらい、小さい村で、小さい家庭の中で生まれたのが、「イエス様」ということです。「イエス様」が、生まれてからはそのイスラエルという国のヘロデ王を緊張させます。その後、何年か経ってローマという一番大きい国を緊張させます。その後、沢山の人はそういう出来事によって殉教し、騒ぎを起こしてしまいます。

現代では地球人類の何十億かの人々が「イエス様」を救い主と信じています。こういうことを見て考えられるのは、やはりイエス様が、一人の女性から人間として生まれたこと事態が、一つの大きい希望であるということでしょう。その希望は、うるさく、騒がしく現れるのではなくて、どこかに静かに誰かによって少しずつ少しずつ生じるのが希望ではないかと思ってみました。

何故このように考えるのかと申し上げますと、今、実際に先が見えないくらいに、日本だけではなくて世界全体が危機に陥っています。昨日はミャンマーというところで大きい地震が起きましたね。そのくらい、今痛んでいる地球のことを、色々と考えてみますと、本当に先がどうなるか分からないくらいに複雑な心境になってしまいます。そして今、色々な災害が治まったとしても、これから回復するのに、日本の未来は結構時間がかかると思います。

今日の福音(ルカ 1・26-38)を通して考えたのは、やはり希望です。希望を作らなければならない私達の立場では、やはり今見えないところから一人一人の人が、少しでもこの痛みに出会って、何か役に立てないかと悩み続ける、そういう心自体が、未来の希望を作るのではないかと思いました。

今、本当に未来のことを考えながら、見えないところで、もちろん見えるところでも、沢山の人はこの危機を乗り越えようと頑張っています。自分のこと全部捨てて、この未来を子供達に残そうとそういう気持ちで、使命感をもって動いています。一人一人の力は弱くて、何も出来ないかも知れませんが、しかし、小さいことによって、赦されることは赦され、もし、力をいただくことができれば、それで十分に希望が出来るのではないかと思います。

皆様も色々なことを考えていらっしゃると思います。とにかく私達は何も出来ないという話より、私が捧げるこの祈りによっても、どうにか乗り越えられるという強い心を持ちあって、希望を作る私達になっていくことが、一番相応しい今の態度ではないかと思ってみました。

もう一度申し上げます。希望とはうるさいところで生じたものではなく、誰かの小さい色々な怖さ、色々な恐れ、色々な震える心乗り越えて受け取った、そして従順した、そういう心によって始まったことを、今日の福音を通して教えていただきますよう。

ありがとうございました。